



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	化石の発見から博物館文化へのつながり : サッポロクジラを例に
Author(s)	田中, 嘉寛
Citation	開発こうほう, 756, 30-33
Issue Date	2026-08
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/100337
Type	journal article
File Information	no756_hokkaido.pdf



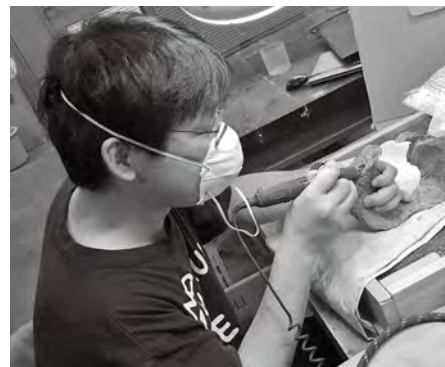
化石の発見から博物館文化へのつながり ーサッポロクジラを例にー

田中 嘉寛 (たなか よしひろ)

博士(古生物学) 札幌市博物館活動センター・学芸員

北海道大学総合博物館・資料部研究員 沼田町化石館・特別学芸員

ニュージーランド、オタゴ大学でイルカ化石を研究して博士号を取得しました。2024年から札幌市博物館活動センターの学芸員として勤務し、2025年にサッポロクジラの論文を出しました。古生物学と博物館学が専門。本稿でも紹介している資料活動、研究活動、交流活動という「博物館主要機能」を結合させる活動事例とその歴史に興味を持って、博物館学の研究を行っています(田中, 2025, 2026: 末尾参照)。



はじめに

「博物館ってなにやってんの？」

「北海道の化石はスゴイって本当？」

このような疑問を持たれたことがある方がいるかもしれません。実は、魅力的な古生物系ミュージアムが北海道にたくさんあります。今月と来月の二回にわたり、化石と博物館の魅力、そしてそれらに魅了された人々によって作られる「博物館文化」について紹介します。

サッポロクジラと人々 発見から研究まで

さて、札幌から見つかり、2025年に新種となったばかりのサッポロクジラをご存知でしょうか。その発見から世界デビューまでに何があったのか、そしてたくさんの方の活動を支えた人々が作り出した「博物館文化」を、ひもといていきましょう(図1)。化石は、まず発見があり、発掘、クリーニング、研究、発信といった流れがあります(図2)。

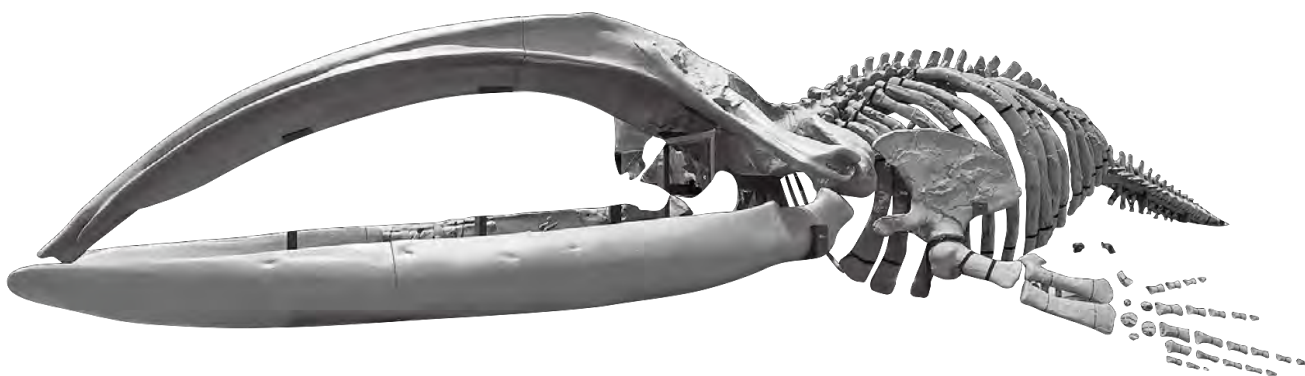


図1 2025年に新種として世界デビューしたサッポロクジラ(メガペリーナ・サッポロエンシス)の全身骨格レプリカ。なんと全長12.7mもあります

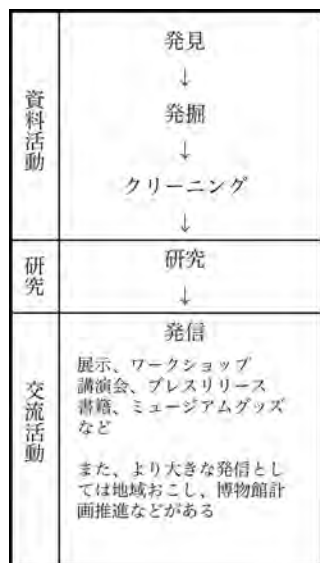


図2 化石研究の流れ（一例）



図3 サッポロクジラを発見なさった森和久氏（札幌市博物館活動センターのサッポロクジラの展示の前で）



図4 サッポロクジラを研究し、命名した古沢仁氏（札幌市博物館活動センター）

サッポロクジラは2008年に札幌市南区にある小金湯のあたりを散歩していた森和久氏によって発見されました（図3）。発見の瞬間から確信に満ちたものでした。森氏は医師であるため、骨についてよくご存知です。生き物の骨が、しかもよく見ると肋骨や背骨が河原の石のなかから少し見えています。写真だけでは骨であることが判断できないと思い、車に積んでいたドライバーをつかって取り出し、札幌市博物館活動センターに持ち込みました。札幌市博物館活動センターにはタキワカイギュウやフカガワクジラを新種として報告

した古沢仁博士がおり（図4）、即座にクジラの骨であるということがわかりました。

森氏とともに化石の発見場所へ行き、発掘をはじめました。これが2025年にサッポロクジラと名がつく、世界でもっともよい保存状態のセミクジラ科化石の物語の始まりでした。

発掘には化石発掘の経験者を含むおおぜいの市民があつまりました。掘れば掘るほど、新しい部分が見つかり、発掘は4年にわたりました（図5）。



図5 サッポロクジラ発掘の様子。かなり大きい岩の塊です



図6 化石の周りの岩を取り除く「クリーニング」という作業を10人以上の方々が、10年かけて行いました

発掘は骨を包んでいる岩ごとに取り上げます。そのため、発掘の後には骨だけをきれいに取り出す作業「クリーニング」が必要です。札幌市民を含め有志の方々によっておよそ10年かけてクリーニングを進めました(図6)。

その後、古沢博士と鯨類化石に詳しい木村敏之博士(群馬県立自然史博物館)らによってクジラ化石の研究が進められ、新村龍也学芸員(北海道、足寄動物化石博物館)によって3Dをつかった復元画が作られ、そして大平寛人博士(島根大学)によってクジラ化石の年代について調べられました(図7)。実におおぜいの方々が関わり、バトンをつなぐようにして、サッポロクジラが命名され、世界にむけてデビューするに至ったのです(Tanaka et al., 2025)。

博物館文化の原点「人々の想い」

「博物館ってなにやってんの?」という疑問に、ここまで読んでいただくと少しだけお応えできたかもしれません。これは化石に関する活動のなかの一例にすぎませんが、このような活動が幾度となくこれまで繰り返されてきたわけです。

「なるほど、そーか」と思われるかもしれませんが、ちょっと待ってください。落ち着いて考えてみましょう。このような博物館活動は、できてあたりまえではないのです。博物館の存在を知っている方がいればこそ、化石の発見の報が博物館まで届きます。また、発掘は無計画では行えません。発掘経験を持つ方々が地域を横断して発掘に協力してくださいました。さらに、クリーニングや研究には修行がいります。そして化石



図7 サッポロクジラを研究した方々と研究風景。左、新村龍也氏(足寄動物化石博物館)と復元画を描くためのパソコン。中央、木村敏之氏(群馬県立自然史博物館)と専門書の本棚。右、大平寛人氏(島根大学)と顕微鏡

は、ようやく、展示や講演会などを通じておおぜいの方々に見てもらえるようになるのです。

なにより大切なことは、一人では発見、発掘、クリーニング、研究、発信、といった一連の活動はできません。サップロクジラを通して、人同士のつながりが生まれ、お互いにより刺激を与え合う関係性が築かれていることが面白い点です。そして、なんとおおぜいの方々が、長い時間をかけて、サップロクジラを通して関わり合い、ここまで形になったものだろうと思い、しみじみします。人々の行動は経験や技術や知識はもちろんのことですが、それらの原点は「想い」だと思います。上記のような活動を引き起こす「想い」には以下のようなものがあります。

- ・見つけた化石のことを人々に伝えたい
- ・重要なものだから発掘して後世に残したい
- ・化石のクリーニング作業に夢中になる喜び
- ・自分の技量が発揮でき、社会に役立つ喜び
- ・どんなクジラなのか解き明かしたい、知りたい
- ・やっと明らかになったことを人々に発信したい
- ・私たちの地元には、このような貴重なモノがあることを展示したい

サップロクジラは化石の数としてはたった1点ですが、人々の「想い」に支えられた「活動」によって世に出てきた特別な1点であると強く感じます。これらの「活動」の結果、サップロクジラは新種として世界へデビューしたわけです。私は、おおぜいの方々の「想い」と「活動」を知り「それってすごい」と思いました。このすごさが何か考えたとき「博物館文化」という言葉が思い浮かびました。

来月は「博物館文化」について、札幌市博物館活動センターを見にいらした方々の「想い」をご紹介しますながら考えてみたいと思います。

ところで、2026年5月30日に、サップロクジラホールを札幌市博物館活動センターに開設しました。ここでは実物のサップロクジラの頭を常設展として見ることができます。サップロクジラホールはサップロクジ

ラの存在を発信することを目的としていますが「博物館文化」の存在を具体的に示すことを密かなメッセージとして込めています。「想い」をテーマとして、ここでご紹介した人々の活躍を紹介するパネルもあります。ぜひ、札幌市博物館活動センター（札幌市、豊平区）にいらしてください。

引用文献

Tanaka, Y., Kimura, T., Shinmura, T., Ohira, H. and Furusawa, H., 2025: A new member of a large and archaic balaenid from the late Miocene of Sapporo, Hokkaido, Japan partly fills a gap of right whale evolution. *Palaeontologia Electronica*. p. 1–58.

田中嘉寛, 2025: 博物館の、目立たないけれど、大事なウラ側化石を中心に. 北海道博物館協会学芸員部会コラムリレー. <https://www.hk-curators.jp/archives/5815>.

田中嘉寛, 2026: 博物館主要機能の「結合」について～日本における理論の歴史～. 日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要.30号